In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	「ソーシャルテクトニクス」を再考する：ジェントリフィケーション地域の中間階級とソーシャルミックス
Author	ジャクソン, エマ / バトラー, ティム / 松尾, 卓磨[訳]
Citation	人文研究. 70 巻, p.261-288.
Issue Date	2019-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	井上徹教授 ： 大黒俊二教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

人文研究　大阪市立大学大学院文学研究科紀要
第70巻　2019年3月　261頁～288頁

「ソーシャルテクトニクス」を再考する
―ジェントリフィケーション地域の中間階級とソーシャルミックス―

エマ・ジャクソン（Glasgow University, UK）
ティム・バトラー（King's College London, UK）
（松尾　卓磨　訳）

Revisiting ‘social tectonics’: The middle classes and social mix in gentrifying neighbourhoods
Urban Studies, 2015, vol.52(13), pp.2349-2365.
Copyright © 2015 by SAGE Publications.
Reprinted by Permission of SAGE Publications, Ltd.

本稿はイギリスの首都ロンドンの南部に位置するブリクストン（Brixton）とペッカム（Peckham）を研究対象地域としている。ブリクストンとペッカムは共に民族的・社会的混淆という点において象徴的な地域であり、ロンドンの中ではジェントリフィケーション（gentrification）が進行している地域としても知られている。本稿ではそれぞれの地域に暮らしている白人中間階級にインタビュー調査を実施し、それをもとに２つの地域を比較しながら、白人中間階級らが同じ近隣地域の「他なる人々」や「他なる場所」をどのように認識し、その認識が彼ら／彼女ら自身の価値観や言動といかに関連し合っているのか、そしてそうした価値観や言動がいかなるかたちで空間に投影されているのかという点を明らかにしている。結論としては、社会階層やエスニシティの異なる「他者」の存在がロンドンのインナーシティ（inner city）に暮らす中間階級のアイデンティティ形成において中心的に作用していることが明らかとなった。またブリクストンについては「ソーシャルテクトニクスsocial tectonics」という概念で状況の把握を行うことができるが、ペッカムの事例からは「他者」に対する中間階級の認識や言動が時間の経過とともに変化していく可能性があるということが明らかとなった。

解題

水内俊雄（大阪市立大学都市研究プラザ）

本稿で研究対象とされているのはイギリスの首都ロンドンの南部に位置するブリクストンとペッカムである。両地域は共に社会的･民族的に多様な住民構成となっており、ジェントリフィケーションが進行している地域としても知られている。本稿の主旨は、それぞれの地域に転入してからまだ比較的年月が短い中間階級の人々に注目し、その中間階級によって同じ近隣地域に暮らす「他者」がいかなるかたちで認識されているのか、その認識が彼ら／彼女ら自身の価値観や言動といかに関連し合っているのか、そしてそうした価値観や言動がいかなるかたちで空間に投影されているのか、という点を２つの地域を比較しながら明らかにすることとされて

※原論文中の「Abstract」および「Funding」の訳出は割愛した。

いる。また、「ソーシャルテクトニクス」や「ソーシャルミックス」といった諸概念の応用の可能性についても検討されており、それらの概念をもって中間階級と「他なる人々」や「他なる場所」の関係性をいかなるかたちで説明し得るのかということが問われている。

本稿の筆者であるティム・バトラー（Tim Butler）は、ロンドン中央区部の中間階級を対象として実施されてきた研究を1990年代から牽引し続けてきた人物である。バトラーを中心に蓄積されてきた一連の研究ではピエール・ブルドュー（Pierre Bourdieu）のハビトゥス（habitus）が確たる里程標とされ、中間階級の価値観、日常的実践、消費・居住地選好、社会的関係等、多角的にロンドンの中間階級にアプローチされてきた。一連の研究において基軸とされているこの視点は本稿の内容にも多分に反映されており、本稿はその一連の研究成果の中でも最も新しい研究成果の１つである。また本稿でも言及されているように、ブリクストンとペッカムを対象とした本研究はハビトゥスの空間性に着目しているマイク・サヴェージ（Mike Savage）の所論に拠るところが大きく、表題の「ソーシャルテクトニクス」概念もさることながら、ジェントリフィケーションという典型的な地理的現象、中間階級の価値観と空間の関係性、ブリクストンとペッカムの地域比較等、空間や地理へ特に注目している本稿は一連の研究の中でも特筆すべき存在であると言える。

本稿ではティム・バトラーとギャリー・ロブソン（Garry Robson）による2001年と2003年の共同研究に繰り返し言及されているが、先述した通り彼らは数多くの研究成果を蓄積しており、そうした一連の研究成果が集約されているのが本稿で繰り返し言及されている『London Calling』（2003年）である。本稿ではそうした過去の研究成果の中から「ソーシャルテクトニクス」的状況が見受けられるブリクストンが再度ピックアップされ、そこにペッカムという新たな研究対象地域を加えた上で「ソーシャルテクトニクス」概念が再考されている。

なお、本稿の批判点としては以下の点を指摘することができる。まず、訳者が訳注において文量を持って説明しているように、本稿において、ひいては上記一連の研究においては「中間階級」の明確な定義が示されておらず、特に新しく研究対象地域とされたペッカムの中間階級に関する情報は著しく欠如している。本稿の内容それ自体が逆説的に一種の中間階級像を浮かび上がらせているとも言えるが、その点を差し引いても本稿を含む一連の研究で中心的な研究対象とされている「中間階級」の輪郭は明確であるとは言えない。また、本稿で調査対象とされているのは（全員とまでは言わないまでも）白人の中間階級であり、世界を代表するコスモポリタン都市ロンドンにあって中間階級層のエスニシティの問題が不問に付されている。筆者ら自身が指摘しているように、本稿では「白人中間階級」と「エスニックマイノリティの労働者階級」という二項対立の構図が半ば前提とされている。そのため表題にある中間階級というのはあくまでも「白人中間階級」であり、ソーシャルテクトニクスやソーシャルミックスとして把握されている状況もまた「白人中間階級」を主体としたソーシャルテクトニクスもしくはソーシャルミックスであるという点に留意しなければならない。

参照

Robson and Butler（2001）Coming to terms with London: Middle class community in a Global City, In-ternational Journal of Urban and Regional Research 25.1, 70-86.

Butler and Robson（2003a）Negotiating their way in: The Middle classes, gentrification and the deploy-ment of capital in a globalising metropolis, Urban Studies 40(9), 1791-1809.

Butler and Robson（2003b）Plotting the Middle Classes: Gentrification and Circuits of Education in London, Housing Studies 18（１）, 5 -28

導入

予てより、我われの調査チームはロンドンの数か所で中間階級[訳注1)]を対象としたインタビュー調査を進めてきた。そして2011年の夏には調査に係る実証的研究が佳境を迎えつつあった[1)]。同調査の核心を成してきたのは、中間階級の人々、中間階級の居住地域、周辺住民に対する中間階級の言動、これら３つの要素の相互関係に関する問題意識であった。中でも我われが特に関心を寄せてきたのはソーシャルミックス（social mix）に対する中間階級の人々の言動、そして彼ら／彼女らが暮らす近隣地域がソーシャルミックスの質的変化にいかに順応してきたのか――もしくはソーシャルミックスをいかに跳ね除けてきたのか、ということであった。ただしインタビュー調査では「ソーシャルミックス」に対する言動そのものについて尋ねたわけではなく、近隣地域の捉え方や近隣地域という言葉の使い方について尋ねている。

同調査を実施した2011年の夏はトッテナム（Tottenham）で暴動が始まった時期でもあり、警察官によるマーク・ダガン（Mark Duggan）の殺傷を機に始まった暴動はロンドン中、否、ロンドンを越えて各地に飛び火していった。我われが調査を実施したペッカム（Peckham）もその暴動が飛び火してきた地域の１つであった。ペッカムでの暴動はいくつかのショッピングストリートで発生したのだが、インタビュー調査の回答者はそうしたストリートを中間階級地域との境界として――ひいては不安の根源として――みなしていた。つまり、暴動の発生に伴って、その現場となったストリートは中間階級と他の地域住民を分離する境界として、そして「他者性」と対峙する場として捉え直されたのであった。

様々な社会階層や民族が混淆している地域の経済的な不平等や人間関係、都市という場に不意に訪れる不安や不満の爆発、この両者の関係性は今後の研究において重要な論点の１つとなる。その点を踏まえた上で、本稿では中間階級の人々が日常生活の中でいかにして自らのアイデンティティを形成しているのかということに注目した。

また本稿ではジェントリフィケーション（gentrification）が進行している２つのインナーシティ（inner city）に注目し、両地域で見受けられるソーシャルミックスについても検討している[2)]。具体的には今日のペッカムと10年前のブリクストン（Brixton）の比較を行っている

（ブリクストンも都市暴動の歴史を有しており、第二次世界大戦以降において最大規模の暴動が1981年に発生している（Scarman, 1982））。なお、本研究は両地域で暮らす住民同士の人間関係を概観するものではなく、中間階級の人々が近隣地域をどのように認識しているのかという点に着目している（近隣地域とジェントリフィケーションの進行過程の関係性に関する異なるアプローチとしてはGlucksberg, 2013; Haworth, 2002を参照せよ）。

本稿の筆者の１人であるバトラーは1990年代にブリクストンを研究対象としているが（Butler and Robson, 2001, 2003）、その研究を通じて彼は次のことを指摘している。様々な民族が混淆している地域で暮らすということに関して、白人中間階級はその魅力について語ってはいたものの、彼ら／彼女らは労働者階級や黒人の住民と接する機会がほとんどなかった。また、居住地域の学校制度において我が子が何らかの問題に直面した場合、白人中間階級の親たちはその責任を労働者階級や黒人住民に負わせるということもあった。その上でバトラーとロブソンは以上の状況を一種の「ソーシャルテクトニクスsocial tectonics」[訳注2)]、すなわち、特定地域に暮らす諸集団があたかも地殻の下層にあるプレートのように接触機会の僅少な環境下で互いに交わることなくやり過ごしている状況として捉えたのであった。そして我われは2010年と2011年にペッカムで調査を実施し、ジェントリフィケーションが進行している移民地区の境界へのアプローチを試みた。その調査においては、境界の主たる構成要素とされた「他者」の生活実態にまでは迫ることができなかったが、「ソーシャルテクトニクス」というアイデアを少なからず応用できるということを確認することができた。そしてその調査を通じて得られた知見から、それまでの「ソーシャルテクトニクス」という比喩は部分的な状況把握に留まっており、特定地域の中間階級とその他の集団の社会的関係を説明していなかったと我われは判断した。

本稿で検討対象とするロンドン南部の２つの地域はそれぞれ異なる時期に「社会的行為social action」を伴って発生するジェントリフィケーションの「最前線」となっていた（Warde, 1991）。両地域における中間階級を対象としたインタビュー調査ではそれぞれ異なる内容の語りを得たが、本稿ではそれぞれの語りに見られる差異の要因を明らかにしながら、比喩としての「ソーシャルテクトニクス」を批判的に再検討したい。なお、異なる時期、異なる地域においてソーシャルミックスに関する語りを抜かりなく拾集することができたが、そこから得られた知見もまた明確に異なるものであった。そうした経緯から以下の問いが浮かび上がってきた。現代社会において生じるそうした差異というのは場所の違いによるものなのであろうか？それとも変化の違いによるものなのであろうか？あるいは、中間階級の底辺層はイズリントン（Islington）やワンズワース（Wandsworth）のように「スーパージェントリフィケーション」を伴って立ち現れた「ジェントリフィケーションの中心地域」（Butler and Lees, 2006）から身を遠ざけようとする傾向があったが、ペッカムとブリクストンの中間階級たちはそうした底辺層の異端的存在としてソーシャルミックス概念の変化を暗示しているのであろうか？あるい

はまた、緊縮や公的セクターの縮小が顕著となり大都市で暮らす中間階級底辺層にもその影響が出始めた時代にあって、ペッカムとブリクストンの中間階級がそうした状況に対する地域レベルでの対処の意義を示しているのだろうか？仮にそうであるならば、大都市で暮らす中間階級の人々、そして中間階級意識の形成に対する中間階級自身の考え方を理解する上でそういった問いや想定というのはどのように活かすことができるのだろうか？１つの比喩としての「ソーシャルテクトニクス」の限界を検討するに際し我われは次のことも予め指摘しておきたい。すなわち、階級意識に基づく、もしくは人種的差異への意識に基づいて形成される自己に関してこれまで様々な理論が提示されてきたが（Hall, 1997; Lawler, 2005; Said, 1995; Skeggs, 2004）、そうした理論はジェントリフィケーションの発生地域やソーシャルミックス、空間の生産に関する議論と接合させることが可能であり、両者のあいだで生産的な対話を実現させることができるということを指摘しておく。

なお本稿ではソーシャルテクトニクスにアプローチしていく中で２つの地域に対して同等に紙幅を割くわけではない。それは本稿の目的が10年前のブリクストンの研究を再評価することではないためである。本稿では、ジェントリフィケーションを先導する階級と旧住民階級の社会的・経済的格差がワンズワースやイズリントンほど大きくはない２つのジェントリフィケーション発生地域（Butler and Robson, 2003）を検討対象とし、とりわけペッカムでの調査を振り返りながらペッカムとブリクストンのソーシャルミックスについての理解を深めていく。

また次の点にも言及しておかなければならない。ペッカムとブリクストンでの調査はそれぞれ全く異なった時期に実施されたものであり、インタビュー調査の方法も異なっている。２地域での調査はそれぞれ異なるプロジェクトの一部を成していたわけであるが、ジェントリフィケーションが発生しているロンドン南部のインナーシティを対象とし、中間階級と他集団との社会的関係に焦点を当てている点は共通している。そのため我われはその共通点の存在によって両調査の比較作業の有効性が担保されていると考えている。ブリクストンの調査では自由回答形式で複数の質問に答える非構造化インタビューを実施し、インタビューの最後には時間制限付きの構造化された質問を設けた。一方、ペッカムの調査では綿密な半構造化インタビューを実施し、それを書き取ったものを利用した。仮にブリクストンのインタビュー回答者にペッカムと同様の半構造化インタビューを行っていたとすれば、近隣地域とそこで暮らす「他者」に関するより込み入った語りを集めることができたとも考えられる。しかし我われは、ブリクストンではソーシャルミックスに関する語りに細やかなニュアンスの違いを見出すことになり、ペッカムのソーシャルミックスについて記述する際には特に「他者」に対する言動の違いに着目することになった。したがって、ペッカムとブリクストンでは着眼点が異なってはいたものの、先述の理由からペッカムでのアプローチは無意味なものとはならなかった。

ジェントリフィケーションとソーシャルミックス：議論の対象とされてきた術語

ジェントリフィケーションの定義は関連する術語の定義と共に長きにわたって議論の対象とされてきたが、その定義は大方以下のように要約することができるだろう。

> ...従前の土地利用者よりも社会的地位や経済的地位の高い新規の土地利用者の人口移動の一過程であり、それは固定資本への再投資による建造環境の変化を伴って生起する。従前の土地利用者と新規土地利用者とのあいだで社会的地位や経済的地位の差が大きければ大きいほど、その過程は一層明瞭に発現する...（Clark, 2005: 258）

「富裕層の土地利用者のための空間の再創造」（2002: 1）というハックワース（Hackworth）のより平易な定義も参照することができるだろう。上記２つの定義においては次の点が共通している。まず、非力で貧困な人々へ犠牲を強いながらより力をもった人々によって空間が改変されていると考え、そうした空間の改変をジェントリフィケーションの中心的要素として位置づけているという点である。そして、そうした空間の改変が単に社会的・経済的動向の一端ではなく、建造環境や空間環境において引き起こされる改変であることを強調している点である。

ジェントリフィケーションを１つの現象として理解する上で富や権力というものが疑問の余地なくその中心的要素として位置づけられているが、それだけではジェントリフィケーションの全体を言い表していることにはならない。ジェントリフィケーションが初めて概念化されたのは労働者階級が多く居住する工業化した都市でのことであった。しかし、現代においてジェントリフィケーションが発生している都市は必ずしもそのような工業化した労働者階級の都市というわけではない。そのためジェントリフィケーションを捉える上ではその詳細や微妙な差異、ジェントリフィケーションが発生しているコンテクストが重要となってくる（Butler and Hamnett, 2009; Glass, 1964）。また、都市全体や近隣地域で発生するジェントリフィケーションは異なるプロセスで発生する可能性がある。しかし、そうであるにもかかわらず、現代のジェントリフィケーションの性質や発生要因、それがもたらす影響に関する議論はそうした異なる発生プロセスを覆い隠すものとなってしまっているため（Hamnett, 2009, 2010; Slater, 2009, 2010）、我われは（一様でない）都市空間の生産に関わっている日常的な数々の実践（Lefebvre, 1974）を前景化しなければならない。我われの見立てでは、ジェントリフィケーション、近隣地域の変容、ソーシャルミックス、これら３つの相互関係が重要となってくる。しかし、少なくとも現在までジェントリフィケーションという術語が使用されてきたのはアカデミックな言説空間であり、政策立案者には殊更相手にされてこなかった。また一方で近隣地域の変容やソーシャルミックスの問題は政策においては注目事項とされてきたものの[3)]、学術的研究で

の対象化は相対的に不十分であった（Atkinson and Kintrea, 2000; Bacqué et al., 2014; Lees et al., 2008; Paton, 2010）。

「ソーシャルミックスが実現された」地域を生み出すための包摂的な都市再生を目指して政策立案者らは都市インフラへの投資を進めようとしていた。しかし、その成功物語の中で語られるジェントリフィケーションは、立退きを伴い居住者人口が意図的に操作される現象として特徴づけられるものが多くあった（Slater, 2006）。ソーシャルミックスはある種の聖杯であるのかもしれないが、一方でソーシャルミックスを実現するための開発事業の背後では「アフォーダブル住宅affordable housing」の建築的・社会的存在価値が蔑ろにされ、アフォーダブル住宅の一団が葬り去られるということもあった――その一例としては「Section 106」[4)]が挙げられ、この「Section 106」ではアフォーダブル住宅の建設ではなく、ランドマークとなる文化施設の建設が提案された。このようにソーシャルミックスは社会分析の対象というよりは、主として政策に内包される真の目的を曇らせるための手段の１つとされてきた。

ソーシャルミックスへの理想的なアプローチの１つとして、1990年代のロンドン中央区部のジェントリファイヤー、そしてマンチェスターとその周辺地域の中間階級による居住地選好に着目し、その背後にある要因に迫る研究があった（Butler and Robson, 2003; Savage et al., 2005）。Savage et al.（2005）はマンチェスターを対象とした研究をもとに労働、余暇、居住といった一連の「フィールドfields」においてハビトゥス（habitus）の感覚が作用しているということを主張し、ブルドュー（Bourdieu）のハビトゥス概念が本質的には空間的な概念であるということを示した。

> 人々はハビトゥスとフィールドが一致している場合に満足をしている。しかし、すぐに居心地の悪さを感じて――社会的にそして空間的に――移動しようと考える。そして移動することによって彼ら／彼女らの不満は取り除かれるのである...モビリティは人によって生み出されるものであるが、同時にそれは比較的固定化されたハビトゥス、フィールド間での移動...より満足感が得られる場所への移動も伴っている。（Savage at al., 2005: 9）

ここから言えるのは、人々が自身のフィールドを空間的に三角測量し「自己愛」と向き合いながら日々生活を送っているということである。中間階級の転入者は居住地選好を体現する消費者として特定の地域へ転入する。消費者として転入するそうした中間階級が近隣地域への帰属についてどのように考えているのか、その点を明らかにするためにSavage et al.（2005）は「選択的帰属elective belonging」という術語を使用している。しかしながら、フィールドとハビトゥスが完全に首尾一貫したものでない場合には一体何が生じるのか。我われのペッカムでの研究から浮かび上がるのは、中間階級が中心となって場所や階級アイデンティティを構成している場合に、その中間階級によって実践される現在進行中の相互関係、日常的実践、戦略的行動、

駆け引きを調査することの必要性である（Blokland, 2003; Blockland and Van Eijk, 2012）。スケッグス（Skeggs）によると「文化に関する認識が様々なかたちで現れ出てくるように、我われが客観的な階級分離として理解してきたものは中間階級の１つ１つの日常的実践の結果として生み出され維持されてきたものである」（2004: 118）。仮に我われがこの考え方をジェントリフィケーション発生地域の社会的関係に関する考察にとり入れるならば、近隣地域の理想的イメージにそぐわない（場合によってはその存在が実質的に無視された）他者に対する中間階級の日常的言動や認識にも目を向け、近隣地域において最も影響力のある要素がどのようにして前景化してくるのかを検討することが可能となる。自分たちとそれ以外というそうした区分は中間階級の人々の階級意識や人種的差異への意識と密接に関連し、彼ら／彼女らのアイデンティティの形成の根幹を成すものとなっている（Hall, 1997; Lawler, 2005; Said, 1995; Skeggs, 2004）。なお、自分たちとそれ以外という区分は必ずしも判然としているものではないが、ブリクストンとペッカムのいずれにおいてもそうした区分に中間階級の人々の階級意識や人種的差異への意識が反映されていた。

さらにペッカムでの調査から以下の点も明らかとなった。中間階級はハビトゥスとフィールドを易々とは抽出することができない環境で暮らしている場合があり、言動にも一貫性の無い部分があった。そして都合に応じて帰属先を選択する選択的帰属が実践される中で、帰属先として選定された近隣地域に関する語りにもそうした一貫性の無さがしばしば反映されていた。そしてそうした過程を経ながらも、ある種の文化資本の一形態とみなされる恵まれた中間階級の人々の中では「エキゾチックな」人々や場所の存在が内面化されていたのであった（Skeggs, 2004; see also May, 1996; but compare with Watt, 2009）。ただし、それらが内面化されていない場合には、時間の経過とともにそうしたエキゾチックなものや驚嘆の対象となったものは注目されなくなっていった。

以下では地域住民同士の社会的相互関係の性質、そして、地域住民が日常生活の中で区別や差異というものにいかなるかたちで対処しているのかという点に注目する。

1990年代のブリクストン――ジェントリファイされた「心の村」

ブリクストンでの調査は２つの地域を対象として1999年に実施された。この調査はロンドンの６つの地域の中間階級を調査対象として、各地域におけるジェントリフィケーションの現状を比較するESRC Cities: Cohesiveness and Competitiveness Programme（CCCP）の一環として実施されたものであった（Butler and Robson, 2001, 2003）。ランベス特別区（Lambeth）に位置するブリクストンは長らくロンドンのアフリカ系・カリブ海系コミュニティの中心地として認識されてきたが、1980年代から1990年代には徐々に中間階級の集住地域としても認識

されるようになっていった。ただし、実際のところ中間階級の居住はそれ以前から――幾分異なったかたちではあったが――確認されていた。メディアによって過去２年以上にわたってブリクストンのジェントリフィケーションに関する多くの事実が報道されてきたものの、ブリクストンで調査が実施された時期（1990年代）にはブリクストンでのジェントリフィケーションは他地域と比較しても初期段階として位置づけられ、その時点ではまだ完結には至っていなかった。ブリクストンでの構造化インタビューはハーンヒル（Herne Hill）やブリクストン中心地域を通るレイルトン通（Railton Road）沿いの「詩的な一画Poets Corner」において75人を対象として実施された（図１参照）。質問票への記入は質問者が行い、予め決められた共通の質問と自由回答形式の質問の両方が用意され、調査地域で収集した様々な情報を参照しながら自由回答形式の質問に対する回答内容が補完された。そして回答者の内訳としては大多数が白人で、20歳代後半から40歳代半ばの持家世帯の世帯主が対象とされた。

Figure 1. Brixton study area.

今日のペッカム――「彼ら／彼女ら、私たち」の狭間で

ペッカムでの調査は比較研究プロジェクト（The Middle Classes in the City: Social Mix or 'People Like Us'（MiCCy））の一環として実施されたものであり、同プロジェクトではロンドンやパリに暮らす中間階級が調査対象とされた（Bacqué et al., 2014, in press; Benson and Jackson, 2013; Jackson and Benson, 2014）。そこで調査対象とされたのは異なる５つのタイプの地域――ジェントリフィケーション発生地域、ソーシャルミックスを確認できるがジェントリフィケーションの発生も見受けられる地域、ゲーテッドコミュニティ、郊外地域、準郊外地域――に暮らす中間階級であった。本稿で対象としているペッカムは上記５つの地域の中

では、ソーシャルミックスを確認できるがジェントリフィケーションの発生も見受けられる地域、とされている（図２参照）。サザーク特別区（Southwark）に位置するペッカムは民族的多様性とソーシャルミックスが見受けられ、経済的繁栄と移民流入によって形成されてきた地域であり、過去20年以上ものあいだロンドンの西アフリカ系コミュニティの中心地域となってきた。ペッカムは長年スティグマ化されてきた近隣地域であったが、近年ではアートや流行りのバーの存在によって注目を受けるようになった。ペッカムの調査では20歳代から80歳代の多様な世帯構成――既婚二人世帯、単身世帯、子どもがいる家族世帯――の回答者を対象とした。回答者の多くは主として持家所有者であったが、民間賃貸物件の借家人も含まれていた[5)]。また回答者は主に白人のイギリス人とヨーロッパ人で、黒人とエスニックマイノリティの回答者はわずか２人に留まった。ブリクストンとペッカムで実施した調査の目的やインタビューの回答者は多くの類似点を有し、また社会、文化、都市空間の各方面からイメージしてみてもロンドンの数多ある地域の中でブリクストンとペッカムはその位置づけが似通っていた。まさに今日の状況から見て取れるように、ペッカムは「粋」なアートを基盤としたエンターテイメントの最先端地域となっており、世界的にも評価を受けている。そしてそうした状況というのは1990年代後半にブリクストンでも確認されており（Talbot, 2007を参照せよ）、それが両地域への中間階級の転入を促す「引きつけ」要因となっていた。ロンドンではジェントリファイヤーというのは高い消費意欲をもった存在として考えられていたため、中間階級の人々の中にはジェントリファイヤーに向けられるそうした典型的な見方とは一線を画したいという気持ちを持つ層が少なからず存在し、そうした層がペッカムやブリクストンに惹きつけられ転入してきたのであった。しかしながら、その時点から幾分時間を経て実施した本研究においては、それまでブリクストンでは実践されていなかったか、もしくはその把握に失敗していたこと（Benson and Jackson, 2013）、すなわち、中間階級の人々が彼ら／彼女らのイメージに基づいて自分たちが暮らす近隣地域を創造し、そのイメージに則って「他者」に対する認識を構築しているということが明らかとなっている。

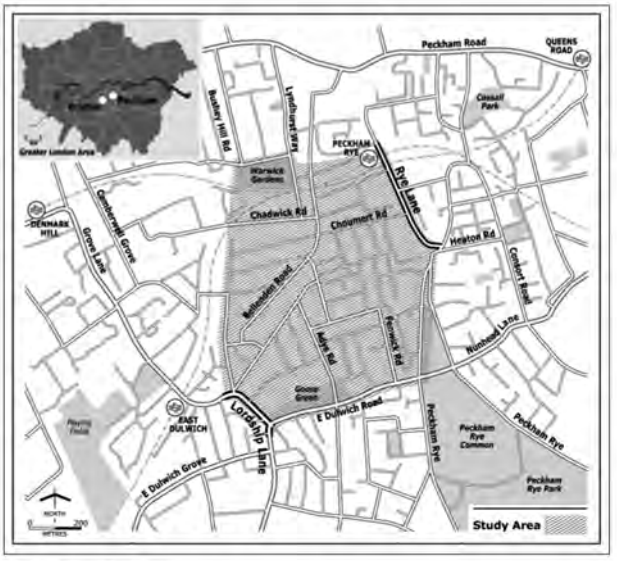

Figure 2. Peckham study area.

中間階級と彼ら／彼女らにとっての「他者」

ブリクストンに関する初期の研究では２つの主要な社会集団――中間階級の白人と（大半が）労働者階級の黒人――が日々互いにわずかな接触機会しか持たず、まるで地殻の下層にあるプレートのように互いに交わることなくやり過ごしている状況が把捉されている（Butler and Robson, 2001）。ブリクストンは様々なエスニック集団が入り混じる地域として象徴的な存在であり、ブリクストンに転入してくる中間階級はブリクストンのそうした部分に惹きつけられてやってきた。しかし、転入してきた中間階級は日々の生活の中で地域に長年暮らしている旧住民との接触や交流がわずかであった。それはつまるところ、転入してきた白人中間階級にとっては民族を越えた交流機会を増やすことよりも社会的に隔絶している状況の方がまだ都合が良かったということを意味していた。「ソーシャルテクトニクス」という言葉を用いて把握を試みたのは、互いに接する機会が少なく日常生活の中で互いに意識されることない――ただし、トラブルが生じた時は別である――中間階級と旧住民の２集団であった。この互いに接する機会が少なく日常生活の中で互いに意識されることがないという状況は主として相互理解が強いられる学校教育の場面で生じ、中間階級の人々に言わせるとその教育システム（特に中等教育）は機能障害に陥っていた。そしてそうした状況ゆえに中間階級の人々はブリクストンで暮らす理由やブリクストンに住み続けるか否かを考え直さざるを得ず、また、我が子の行動や振舞いを判断材料として非中間階級住民に対して価値判断を下すということも頻繁に生じていた。

ブリクストンと同様にペッカムもロンドン南部に位置しており、社会的・民族的混淆がみられる地域として象徴的な存在であった。そのペッカムにおける直近の研究ではアフリカ系黒人とカリブ海系黒人の間で生じている社会的分断に注目され、その社会的分断の複雑な進行過程について明らかにされた。また同時に、ペッカムに定着して久しい白人中間階級と新しく転入してきた白人中間階級の間で生じている社会的分断についても考察されている（Benson and Jackson, 2013; Bacqué et al., in press）。ペッカムのベレンデン通（Bellenden Road）界隈は本研究の調査対象地域の中心地域であり、ジェントリフィケーションが進行している地域でもある。そしてそこで暮らす中間階級の白人住民らのあいだでは、ベレンデン通界隈の住民である、ということが意識され、その意識に基づいて自らの階級意識や社会的アイデンティティが育まれていた。これは10年前にブリクストンで得られた知見とは対照的ではあるが、我われはペッカムの白人中間階級による自己形成の関連要素として、アフリカ系黒人やカリブ海系黒人の存在の重要性について指摘した。具体的に言うと、様々な民族が行き交う賑やかなショッピングストリートのライ通（Rye Lane）（Hall, 2012を参照せよ）、そして白人中間階級の定着によってジェントリファイされ消費の空間となったイーストダルウィッチ（East Dulwich）（Jackson and Benson, 2014）、この２つの地域で暮らす中間階級の住民が既存の階級やエスニシティに

関するイメージに意識的に「対抗」するかたちで一定程度自己を形成していたのであった。インタビュー調査の回答者はライ通とイーストダルウィッチ通に挟まれた地域に暮らしており、彼ら／彼女らはソーシャルミックスについて熱心ではあったが曖昧に濁して語ることもあり、必ずしも饒舌に話しているというわけではなかった。またそうした語りから、彼ら／彼女らがつくり上げてきた「ジェントリファイされた地域にいながらもジェントリファイされていない」自己のイメージを読み取ることができた。そしてさらに、ペッカムの回答者は10年前に調査したブリクストンの回答者よりも近隣地域と濃密な関係を築いており、近隣地域に対する彼ら／彼女らの認識は変容しつつあった。

ここで本稿の目的を再度確認しておくが、本稿において我われはブリクストンに関する初期の調査で提起したソーシャルテクトニクスについて手短に再考した上で、ブリクストンで得られた知見とソーシャルミックスへより積極的に順応していったペッカムの住民の経験を比較する。そこで我われが指摘できることは、2010年から2011年にかけてペッカムのベレンデン通で確認を進めてきた「他者」への認識に関することである。インタビュー回答者の語りには「他者」の存在への意識が見受けられ、多くの場合はライ通のショッピングストリートでの経験に基づいて「他者」が特徴づけられていた。また、中間階級としてのアイデンティティや中間階級が暮らす地域の境界を確定させる場合にも「他者」の存在が意識されていた。加えてペッカムで実施したインタビューを踏まえて次の点についても指摘しておく。それはすなわち、都市の中間階級集住地域における中間階級のアイデンティティの形成において、階級意識や民族意識に基づき認識される「他者」の存在はいかなるかたちでその中心的要素となり得るのか、ということを理解するためにはソーシャルテクトニクスという概念を基軸とする必要性があるということである。そしてさらに近隣地域における様々な実践や振舞いは時間の経過に従って変化し得るということも付け加えておく。以上より本章は次のように締めくくることができる。中間階級は「地域」で過激な投資を行う存在として連想されているが、その中間階級のあいだで内部分裂が拡大しつつあった。そして、中間階級の実践や振舞い、特に「地域で暮らす他者」に対する発言や「地域で暮らす他者」との行動を介して、そうした内部分裂やロンドンの「中間階級である」という感覚が社会的関係や地理空間に投影されているのであった。

ソーシャルテクトニクスとジェントリフィケーションにおける他者：ブリクストンの事例

1990年代後半のブリクストンのジェントリフィケーションに関する記述では、ブリクストン（別の事例としてハックニー（Hackney）のダルストン（Dalston）も挙げられる）を含む社会的・民族的混淆の著しい地域に暮らす新しい都市型中間階級（the new urban middle classes）というセクションが特に注目された。そしてそうした地域は、比較的安価でありながらも魅力

をも兼ね備えた住宅ストックが存在し、都心への交通アクセスが至便な地域、というだけではなかった。つまり、イズリントンやワンズワースが辿ってきた状況と同じように、そうした地域の一部の場所には中間階級が集住していたが、一方で同じ地域の他の場所では中間階級の姿が見られない状況となっていたのであった（Butler and Robson 2003）。

そもそもブリクストンに白人中間階級が惹きつけられたのはブリクストンが有する「都市に住まう他者urban other」という要素のためであった。ここで言う「他者」とは主としてカリブ海系の黒人を指し、その多くは1960年代にイギリスへ移住してきた後にブリクストンで生活を営んできた。彼ら／彼女らカリブ海系の黒人はイギリスへの移住時に露骨な人種差別を受け、住居の賃借りが困難であると判断した彼ら／彼女らはブリクストン等において住居を購入せざるを得なかった（この点に関してはRex and Moore（1967）を参照せよ。バーミンガムのインナーシティを対象としておりブリクストンとの文脈は異なるが、住宅の賃貸や売買に見出される階級意識やその歴史について説明されている）。そしてそうした地域は白人中間階級によって「立ち入り禁止」地域とみなされていたが、1990年代末までには住んでみたい魅力ある地域へと俄かに変貌を遂げていた。

しかしながら、そうしたブリクストンへ転入し自宅を購入した白人中間階級にとっては、ブリクストンで暮らす黒人住民は異世界に暮らす住民と考えられ、白人中間階級は黒人住民に無関心であった。その心理状態は以下の住民の言葉に見て取ることができる。

> 私はこの地域に漂う緊張感を気に入っていますよ。自分たちと同じ系統の人もまわりにはいますが、こうしたインナーシティ的な雰囲気を楽しむことができる特異性は気に入っています。この緊張感を本当に楽しんでいますよ...多文化的とかではなくて、黒人と白人です。ここの人たちは一緒に生活しながら*同時に*お互いを意識していないんですよ。私はここのそういったところを気に入っています...まさに都市での生活のお手本です...ブリクストンの中心部で感じる不安や緊張感にはわくわくしています。（BN15）（発言文中の斜体強調は原著者らによる。以下同様。）

転入してきた中間階級たちは当初はソーシャルミックスを肯定的に捉えることもあったが、ブリクストンの学校教育を経験するにつれてソーシャルミックスに対して無関心となり、ソーシャルミックスはむしろ有害なものとして捉えられるようになっていった。新参の白人中間階級らは黒人の若者を「ストリートキッズstreet kids」とみなしてますます問題視するようになり、そうした黒人の若者が路上で中間階級の子どもたちに不安を覚えさせたり、ランベス特別区における到達度が低い学校教育の元凶になっているとも考えられるようになっていた（Butler and Robson, 2003）。

ブリクストンでは唯一１校の小学校（サドバーンズ（Sudbournes）。この小学校の通学区域

の半径は100m以下である）だけが子どもを入学させるのに相応しい学校であると評価され、中等学校に関しては「進学にふさわしい」学校に分類された学校は存在していない。そのため子どもが11歳となり中等学校への進学時期が近づくとブリクストンから（実のところロンドンからさえも）転居していた。非中間階級住民（その多くは黒人である）のあいだで広がり、かつ、ブリクストンの中等学校の実績にも現れ出ている「願望が欠乏している状況poverty of aspiration」を悲観的に思いながらも、それを尻目に多くの中間階級の家庭はブリクストンから転居していたのであった。地元住民の１人であるオリヴァー・レトウィン（Oliver Letwin）――現在は政府大臣となっている――はかつて、リリアン・ベイリス（Lillian Bayliss）の学校へと娘を送り出すくらいなら路上で物乞いをしたほうがまだましである、という発言をした。彼の考え方はあまりに過激ではあるが、それはブリクストンでの生活において肥大化した中間階級的価値観を反映したものでもあった。他方でペッカムの中間階級の認識には、主流の中間階級と民族的・社会的な「他者」との狭間にいるがゆえに自覚される中間階級としての立場、そして彼ら／彼女らが暮らす場所への意識が明瞭に反映されていた。この点を踏まえて次章ではこうした中間階級の意識がペッカムの調査地域の中間階級住民のあいだでは具体的にどのように作用してきたのかということについて検討する。ブリクストンの中間階級の認識には「他者」との社会的差異や近接性が強くは反映されておらず、そうした状況は１つの分類手法を用いてソーシャルテクトニクスの「mark １」型（Butler and Robson, 2001）として分類された。しかし本稿のペッカムに関する検討ではそれとは異なる手法を用いて中間階級と「他者」の差異に関する記述を進めていく。

ソーシャルテクトニクスを再考する：ペッカムの中間階級であるということ

ペッカムでのインタビューの回答者は民族を基準として集団を区別するということがあったが、そのようなかたちでの区別はブリクストンで確認された「ソーシャルテクトニクス」とほとんど同様のものとして考えることができる。「ソーシャルテクトニクス」というのは近隣地域での実践に関する回答者の言葉に見出すことができるものであったが、同時に、例えば断層線としての性質を有するライ通のように地域にマッピングされるものでもあった。ライ通の西側地域の特徴は主として白人や中間階級が暮らす地域であるという点にあったが、東側の地域に関してはあまり十分な情報や関わりが持たれていなかった（「私はペッカム自体、そしてライ通もあまり見て回ったことがありません。また今後、ペッカムライ（Peckham Rye）駅よりも北側に行くことも間違いなくないでしょうね。要は私の中ではライ通がまさに文化の境界線なんですよ。」（P25））。このようなライ通の断層線としての位置づけは2011年にそこで発生した暴動が端緒になっていると考えられる[6]。同じことはペッカムハイ通（Peckham High

Street）の北側でも言えることであり、そこには貧困と暴力の巣窟として語られるノースペッカム（North Peckham）団地があったが、ペッカムハイ通よりも南側で暮らしている中間階級にはほとんど影響がなかった。他には夕刻時のペッカムライ駅を出てからの行き先に言及する回答者もいた。その回答者は、ペッカムライ駅を出て右へ曲がりベレンデン通に向かう人たちは中間階級、白人、スーツを着た人たちで、駅を出て左へ曲がりノースペッカムへ向かうのは黒人か貧困層である、と述べていた。この区分は回答者（P11）によって語られたファーマーズマーケット（Farmer’s Market）の事例からも読み取ることができる。

> １つすごくおもしろい発見があって、図書館の隣で毎週日曜日にファーマーズマーケットが開かれています...そこではケント（Kent）やサセックス（Sussex）、エセックス（Essex）からやってくる人たちが６軒から７軒の露店を出していて、すごく小規模ではありますが、そこに行く常連客のほとんどはヨーロッパ人です。アフロ・カリビアンの方たちが好む食べ物類はほとんど置いていないですね。だから私が言わんとすることはそういうことで、それがペッカムを表す状況で、ここにはほとんどありません...相互の交流というものが。（P11）

ただし、この地域で暮らす中間階級とそれ以外の住民のあいだに見られるこうした分断は、相反するかたちで異なる捉えられ方がなされていたというのが事実である。確かに回答者の中には境界であるライ通を越えて相互交流が行なわれる機会が失われていることに失望している人も少なからずいた（私はもっと交流があったほうがいいと思います。なぜなら、分離されている状態が好きではないからです。西アフリカの文化は向こう、白人中間階級はここ、のように分離されている状態です。それは私がロンドンで暮らすことが好きですし、多くの文化が混在している状況の方が好きだからです（P９））。しかしそうした意見がある一方で、「ペッカムは大切です。ですがペッカムライは別です」（P32）という語りもあり、分断が中間階級としての住民意識を強固なものとし、それによって安心で周囲から分離された場所が守られるという意見もあった。以上より１つの比喩としてのソーシャルテクトニクスは依然としてジェントリフィケーションの発生地域において共通して見出すことができたと言える。

以前にブリクストンで行った調査でもそうであったが、我われは上記の「世界が分断されている」状況と合わせて、多様性の価値を認識している語りを得ていた。地域の多民族性を称賛する語りから浮かび上がったのは、多民族性というものがその地域で生活していくことの積極的理由として採用されているということであった。その多様性の称賛とは具体的には次の２種類の相互関係、すなわち（１）異なる階級の出身であり、かつ／もしくは、異なる民族的バックグラウンドをもった地域住民との相互関係、（２）ライ通という空間との日常的な相互関係、この２種類に関連付けて語られていた。なお、前者の相互関係はありふれた地域変容に関する

話の中で出てきたものであり、以前から暮らしていた労働者階級の白人やカリブ海系の黒人が地域から転居していったり、その地域で亡くなったりすることで発生するジェントリフィケーション、白人夫婦や幼い子どもを抱えた白人世帯の転入によって労働者階級の白人やカリブ海系の黒人の住処が奪われることで生じるジェントリフィケーション、これら２つの典型的なジェントリフィケーションと関連付けて上記の前者の相互関係は語られていた（繰り返しになるが、こうしたジェントリフィケーションはブリクストンでの調査を想起させる）。新しく転入してきた人々は多民族的で社会的に混淆状態にあるという近隣地域の特性に惹かれて転入してきたのであったが、そうした魅力的な特性を保障していたのは、ジェントリフィケーションが発生してもなお地域に留まっている労働者階級の白人やカリブ海系の黒人の存在であった。中間階級と都市に関する研究プロジェクトで対象とした５か所の近隣地域の中でも地域内での住民同士の結びつきが最も強固であったのはペッカムであり、以下のようにコミュニティや地域住民間の友好的な関係が語られるということもあった。

> お隣にパキスタン人の隣人がいますが、私たちはお互いを良く知っています。よく食べ物の交換をしたりしますよ。（P１）

> 私はオーストラリア人で、パートナーはイギリス人です。そして私たちは同性愛者同士です。お隣の女性はオーストラリア人、道を挟んで向かいに住む女性はインド人、お二人ともペッカムの今のお宅で長く暮らされています。インドから来られた女性のパートナーはデンマークからお越しになられた方のようで、お二人はフランスにお家をお持ちだとか。ですので、パートナーの彼はフランスで生活することもあれば、イギリスで生活することもあるようです。そのお隣には別のご夫婦がお住まいで、男性はイギリス人。ここに長く暮らされています。そのご夫婦はかなり年上で...ご夫人はセントルシアのご出身です。私が住んでいる地域はとても多文化的で、私たちはみなそう思っていて、みなさんと一緒にディナーへ出かけることもありますよ。例えば...土曜日の夜なんかに。（P19）

先述した多様性の称賛と関連付けて語られる２つの相互関係のうち、後者の相互関係はより複雑なものであった。というもの、我われは「２つの世界」という分断への懸念、そして多様性の称賛、これらに加えてペッカムが有する多文化的な雰囲気への是非に関して非常に曖昧な立場や言動があるということも把握していたためである。そうした曖昧な立場や言動は特にライ通で見られるアフリカらしさの認識において確認することができた。

ライ通はペッカムハイ通からペッカムライコモン（Peckham Rye Common）へと伸びるショッピングストリートであり、インタビュー回答者の語りの中ではライ通が有する中心的機能が克明に捉えられており、ライ通は肉の香りや買い物客らの賑わいといった感覚的に強烈な

側面に注目して描写されていた。またライ通は魅力と嫌悪感の両側面から捉えられる場所でもあり、「個人的に私はライ通の多くの部分にうんざりしています」(P24) であるとか、「ナイジェリア人がここを訪れた時にこう言っていましたよ、本当にラゴス (Lagos) へ帰ってきたみたいだ、とね。...私はうす汚れたラゴスには住みたいとは思わないです」(P43)、と語る回答者もいた。

ライ通に関するより鮮烈な語りは食料品、特に露店で陳列されている食肉や鮮魚に関するものであった (「初めてこの地域へ来た時は大変衝撃を受けました。なぜなら、親鶏が吊るされた肉屋がたくさんあったからです」(P29)、「あなたも精肉店が並ぶストリートを見たと思いますが、あれは考えられないですよね、少し不快ですよ」(P16))。ここから言えるのは、上記のように語る「嫌悪感を抱く主体disgusted subjects」(Lawler, 2005) は白人の労働者階級を避けていたわけではなく、エキゾチックでありながら不安をも感じさせる「他なる」場所、つまり黒人やアフリカ人たちの場所 (「リトルラゴス」、「第三世界」、「奇妙」等と表現された場所) を避けていたということである。

以上のようにライ通に対する認識は両極端なものであったと言えるが、インタビューの回答者の多くは安価な果物や野菜を購入するというかたちでライ通を有効に活用していた。

> 私はおそらくライ通をよく使っているほうだと思います...うん...ロードシップ通 (Lordship Lane) に行くのは好きですよ、ライ通を避けているみたいになっていますが。ロードシップ通は安全で、よく知っているし、クリスマスが近づくといいものが置いているし、いいデリカテッセンもあります...でも、私はそういう類のお店を見て回ることはありません...私たちは中間階級ではありますが収入源は1つですし ― 私には働かない時期というのがあって、生活費も限られていますので、私はロードシップ通よりもライ通へ行きます。(P 4)

我われが調査で対象としたインタビュー回答者はライ通を無視するということはなく、ライ通という存在に衝撃を感じる経験があったとしても、その後は安心感を抱いていた (Hooks, 1992: 21-39; Frankenburg, 1993を参照せよ。人種的差異への接触がいかにして望ましくも脅威として位置づけられるのかということに関する議論である)。回答者は自分たちが暮らす地域と、紐帯がより強固な中間階級地域や民族的な多様性が見受けられない地域との差異を強調するために近隣地域の縁としてのライ通の存在に触れていた。しかし、回答者が暮らす地域が実際に、紐帯がより強固な中間階級地域や民族的な多様性が見受けられない地域と地理的に近接していたのはイーストダルウィッチ(先述のロードシップ通も含む)側であった。そのためイーストダルウィッチが南側における境界として捉えられていた。その点についてはP16によって次のように捉えられている。「あなたが行って楽しむことができるまた違った類の縁ですが、

あそこはもうダルウィッチです…少し嫌悪感を覚えるような場所です。北側へ行くにはあそこからでは少し遠すぎますね」（P16）。

なお、紐帯がより強固な中間階級地域や民族的な多様性が見受けられない地域とペッカムが異なっているという認識はP22によっても共有されていた。P22は20歳代の女性看護師で、ペッカムをジェントリフィケーションへの対抗の場として考えていた。

> ペッカムをクラパム（Clapham）やバラム（Balham）のような中間階級地域と同じように考えることはできません…ペッカムではそうした地域ほどジェントリフィケーションが進行していないからそう思うのかもしれないです。ジェントリフィケーションがこのまま今後も続いていくのかどうかはわからないですし、そうですね、他の地域も含めジェントリフィケーション全般に対していくつかの特定の地域が抵抗の場になりうると考えていて、例えばブリクストンが思い浮かびます…同じように…私は自分が抱いている危機感が特別なものであるとは思ったことはありません。（P22）

ペッカムの回答者を通じて把握できたことであるが、P22のような公的機関で働く若い人と、1970年代から1980年代にペッカムへ移住してきた旧住民は共にこの地域でジェントリフィケーションが激しさを増していくことに懸念を示していた。また彼ら／彼女らはより多様性の豊かな地域であるべきであると主張する傾向にあった。その点に関連する語りとして60歳代の事務弁護士であるＰ３Ｍは、若い中間階級が地域へ流入してくることを心配していた。

> 高架下のパブの外やバーの中で中間階級と一緒になったとしましょう。その時、私はよく分からない何かによっていらいらすることがあります。それはつまり、ある種の「権利の感覚」のようなもので…基本的に彼ら／彼女らはひとりよがりで嫌な人たちなんですよ…いろいろな人が入り混じる地域であるということには本当に幸せを感じています。しかし、もしペッカム全域でジェントリフィケーションが進んだとしたら、私はどうすればいいかわからないです…取り乱すでしょうね。（Ｐ３Ｍ）

ライ通は中間階級の居住地域の縁と中間階級のアイデンティティの縁として捉えられる存在であったが、多様性を――ひいてはライ通を――評価したり、それと上手く折り合いをつけていくこと自体がペッカムで暮らす中間階級のアイデンティティの一部であったと言うこともできる。ペッカムの中間階級は、彼ら／彼女らの地域とジェントリフィケーションがより進行している他の地域との差異を強調するためにライ通を語りの中に含めていた（「私はイーストダルウィッチが好きで、とても派手なところが気に入っています。ただ何かが足りていないと思います…私はペッカムが醸し出す垢抜けていない雰囲気が好きです。実生活的というか、ヤッ

ピーが少ない谷間みたいな雰囲気です。」P20)。このようにペッカムの中間階級の中には自分自身を中間階級の中でも異なった存在として位置づける人もいた。

また確実に言えることとして、インタビューの回答者の（イーストダルウィッチ以上にライ通における）消費選好は金融危機の余波や不景気と密接に関連しているということであった。P４の語りには既に触れているが、彼女は近年の状況がどれほど経済的に不安定であるかということ、そしてその影響が家庭にも及んでいるということを語っていた。

エマ：不景気や経済の動向に関して、あなたはそれが自分の生活に何らかの影響を与えていると考えていますか？

Ｐ４：ん...えっと、影響は確かにありました。というのも、私の夫はメディア関係の仕事をしていたのですが2009年の７月に失業したからです。ですので、明らかに私たちは大きな影響を受けました。ただ彼は新しい職に就きました。それでも、経済的な影響は私たちにはあって、なぜなら...メディア関係で彼が新しい仕事を得たとしても、それは必ずしも安定を意味しているわけではなくて、それは特にそうした専門的な仕事であるからこそ決して安定していないのです。

また、近隣地域やそこで見受けられる言動に変化が生じていた点も注目に値する。回答者の中には彼ら／彼女らのライ通に対する言動が時間の経過と共にいかに変化したのかということを語る人もいた。例えば大学教員であるP10は、彼女自身と近隣地域との関係がいかに「発展」してきたのかということを語っていた。

当初私はこの道、ベレンデン通をすごく気に入っていましたが、今はライ通の方が良く行くようになっています。ライ通を好きになる前、少し不安があったんですよね、ちょっと怖かったというか――生き生きとした草花がなかったの！（笑）――そう、ジェントリファイされた地域には新鮮な花があるものでしょう（笑）...そう、それに慣れていなくて、でも今はライ通に行くことを楽しみにしていますよ。ライ通に行けば本当にいい品質のフルーツや野菜も手に入れることができますし、さっき言ったように、ベレンデン通にもそうした場所はありますが、今はライ通の方がよく利用します。(P10)

こうした経験は大学事務員であるP34にも共有されていた。「ライ通（笑）...本当にカオスで、汚くて、そう、カオス！だから私はライ通がまったく好きではなかったです。しかし（ストリートの方へ）引っ越すとライ通は違った経験をさせてくれました。今ではすごく良いところです」(P 34)。こうした心境の変化は、ソーシャルテクトニクスが確認される近隣地域において互い

にすれ違いを起こしているような人間関係が時間の経過と共に解きほぐされていく可能性があるということを示しており、重要な意味を持っている。

ペッカムの回答者がライ通を境界としてみなしているということは既に述べたが、彼ら／彼女らは「選択的帰属」（Savage et al., 2005）に触れる話の中でも部分的にライ通に言及していた。また数人の回答者が語っていたように、近隣地域というのはそこで暮らす住民によって捉え方が異なり、変わっている、エキゾチックである、驚きを感じるといった地域に対する印象は時間の経過とともに住民にとって当たり前の感覚になるということもあった。これはアイデンティティが決して既に完成されたものではなく、むしろ変化のただなかにあるということを示している。またホール（Hall）が言うように、「あるものとそれとは別のものを心理的に分別すること、つまり相反する価値観を介して恒常性は構築されている」（1997: 47）。同時にある種の文化的資本として考えられるものとして多様性と「折り合いをつける」ということもあるが（May, 1996）、これはWatt（2009）が「選択的帰属」と呼ぶものとは異なっている。つまり、中間階級はあまり「評価」を受けていない地域から転居していくことがあり、その際に彼ら／彼女らの中で階級意識に基づいた距離感の取り方が醸成されていくのであり、このプロセスが多様性と「折り合いをつける」ことと関連している。

私たちがペッカムで明らかにしたのは、近隣地域からの脱出やソーシャルテクトニクスのはっきりとした痕跡ではなく、より強力で、より曖昧で、明らかに複雑な事実であった。それは以下のように別言することができる。第一に、中間階級の空間と「他者」の空間の分断は、「選択的帰属」では捉えられないより直感的な言葉によって生み出されていた。第二に、差異と共生していく能力はペッカムの住民であるということと部分的に一致していた（May, 1996を参照せよ）。そして第三に、「他者」の空間との関係性は時間の経過によって変化することがあった。

中間階級は軽い気持ちで過去のライ通を引き合いに出すということはせず、過去のライ通と向き合い、それを受け入れ、時にその一部を「選択的帰属」に関する語りに組み込んでいた。また、ライ通の存在を１つの境界として強調する（「ペッカムライというのは他なる何かである」という言葉に表れている）こともあったが、一方でライ通をイーストダルウィッチと比較し、ライ通を利用する自分たちは他の中間階級とは違った中間階級であるということを主張することもあった。

近隣地域間で見られる差異は「他者」と対峙する場やそれをマネジメントする手法に見出すことができた。ブリクストンでは、中間階級が学校現場において「悪いかたちでのミックス」に直面するということがあり、中間階級たちのそうした反応が教育方法に反映されることがあった。対照的にペッカムでは、多様な近隣地域の中で差異というものにどのように向き合っていくのかという点に関して様々な手段がとり入れられていた。例えばベレンデン通は中間階級住民のニーズを（独立した本屋やカフェといったかたちで）満たしているが、ペッカム

の住民の多くはそうしたベレンデン通での商売を支えていくという強い責任感を持っていた（Benson and Jackson, 2013）。例えばライ通の一角や住宅街で出店していた魚屋を巧妙に廃業させるキャンペーンが行われようとしていた時も、ペッカムの住民はそれに対抗する術を既に会得していた。

> ここにはかなり多くの魚屋や肉屋が出店しています…元は古い倉庫でした。そしてここは、注意しなければいけないのですが、ここはお店が無くて問題となっていたストリートで、それがちょうど開かれて、それから…計画の許可が特段求められるということもなかったため、すべて違法で評判は悪いです…それでもとてもいい場所です…ペッカムで為された行動のポイントはそれを監視しようとすることで、私はそう理解していますが、サザーク区は何もしませんでした。区は引き延ばさなければならなかったんですよ…店舗を休業させることを。（P11）

こうした特定の近隣地域における場所づくりを目的とした実践は近隣地域のあり方を特定のかたち（中間階級たち自身が居心地の良さを感じるような方法）で再生産することにつながるものであった（Benson and Jackson, 2013）。

以上の状況は「ソーシャルテクトニクス」という比喩をより重層的に理解し、詳細に検討する必要性があることを示している。ペッカムでは「他者の存在」が中間階級のアイデンティティ・場所・自己の*形成を積極的に促す*中心的要素となっており、また、ペッカムは「他者」との関係性や「他者」を起因とする空間的実践が時間の経過と共に変化していく地域でもある。そのためソーシャルテクトニクスという概念はそうしたペッカムのような地域で見られる社会的関係の複雑さを余すところなく説明することには失敗している。もちろん、現状はまだソーシャルテクトニクスという概念をもって把握することができる社会構造であるのかもしれないが、その現状は様々なかたちで経験され、語られ、説明されている。

ペッカムでの調査を通じて中間階級の住民がライ通に対して、そしてライ通の向こう側に暮らす人々に対して不安や不安定な関係性を持っていることを示した。明確な境界を想定し差異を空間化するということは場所とアイデンティティを強固に結びつけるということを意味している。しかしながら、境界とみなされる場所の現状を維持すること（先述の魚を売る商店の事例がその好例である）への懸念があり、また、ライ通をもっと中間階級にとって居心地の良い場所に変えてほしいという要望が出ていることも確かである。

ペッカムの事例が示しているのは「他者」が中間階級のアイデンティティにいかにして組み込まれ、自己や近隣地域に関する語りの中でいかに捉えられているかということであったが、同時に「他者」がいかにして中間階級の自己や近隣地域において忌避されているのかということも明らかとなった。ペッカムで実施したインタビュー調査の回答者の多くは彼ら／彼女らが

暮らす側とライ通を挟んだ向こう側とのあいだで交流が少ないことを悲観していた。この点に関して言えば、中間階級が描写した近隣地域内の関係性は「ソーシャルテクトニクス」として捉えられる状況と合致している。そのため「ソーシャルテクトニクス」という概念は利用価値のある概念であるとも言えた。しかしながら本稿では、「他者」とすれ違いを起こしていたり、「他者」との交流が少ない状況であったとしても、そうした「他者」の存在が完全には無視されていない地域にもアプローチをしてきた。そこで明らかにしてきた事実を踏まえると、これまでの「ソーシャルテクトニクス」概念では中間階級のアイデンティティ形成における「他者」や「他なる」場所が果たす役割を把捉することに失敗していたと言える。

結論：階級意識の醸成、結合、「対抗」

それではペッカムの事例はソーシャルテクトニクスに対する理解をどのように深めるものであったのだろうか？もしくは、既存の理解に対してどのような異議を提示するものであったのだろうか？そもそも第一に、本稿で対象とした2つの住宅近隣地域には明らかな相違点が――そして共通点も――あった。ブリクストンにおいて「カオス」もしくは「活気に満ちている」場所として捉えられていたのは地下鉄ブリクストン駅の周辺地域であり、そうした地域は本稿で考察したブリクストンの住宅地域から若干距離のある場所であった――この点に関してはベレンデン通と近接しているペッカムのライ通やペッカムライ駅の状況と異なっている。ブリクストンでのインタビュー調査の回答者の多くは、彼ら／彼女らが暮らす地域が比較的閑静で、ブリクストンの中心地域から距離があるという点に価値を見出していた。レイルトン通――1981年の暴動発生地であり「詩的な一画」の境界でもある――に活動拠点を置くある団体は、そこが暴動のフロントラインであったという歴史に未だに浸っていたが、ペッカムのライ通は同じような意味合いで描写されることはなかった。また、ブリクストンでは近隣地域というよりは学校や中心地域のストリートに関する語りの中で、混淆の好ましくない状態に対する懸念が示されていた。ブリクストンの中間階級はこうした懸念を示しておきながら、一方では地域に多様性を求めていた。しかしそうであるにもかかわらず、彼ら／彼女らは自宅やストリートにおいて、また特に子供が通う学校等においても、何らかの社会的関係を築き「身をもって多様性を実践する」ことに積極的ではなかった。そして多くの中間階級と同様に彼ら／彼女らが抱く中間階級特有の恐怖心やアイデンティティはその子どもたちへと受け継がれていた。

そのようなブリクストンとは対照的に、ペッカムには子どもがいない中間階級や育児を終えた中間階級が暮らしており、ペッカムへやってきてまだ間もない小学校入学前の子どもや小学生の子どもを持つ中間階級もいた。そういった中間階級の親たちは様々な機会を利用して小学校区の地理について話し合う場をつくっていた。そうした話し合いでは中等学校に関する心配も話題として出ていたが、それはまだ大きな問題にはなっておらず、他には新しい学校の設置

（アカデミーやフリースクール等）[7] などが話題にされていた。以上を踏まえると、ペッカムのライ通は中間階級の居住地域と近接しているということ、そしてブリクストンとペッカムには明らかな相違点（実は一見するとブリクストンよりもペッカムの方がソーシャルテクトニクスが空間的に顕著に現れているようにも思える）があるということについてインタビューの回答者に事前に知らせる必要があった。本研究の調査ではそれを行っていなかったため、インタビュー回答者の語りに基づいて明らかとなるブリクストンとペッカムの差異には一定の留保が必要となる。

第二に、時代、階級意識の形成における変化、地域概念の各側面から得られた知見があった。かつてブリクストン（1998年～2000年）においては地域住民の関心は主として（ソーシャルテクトニクスの状況が明らかであったにもかかわらず）差異との共存や消費インフラへの近接性に向けられていた。しかし本稿での検討を通じて明らかになったのは、ブリクストンで広がっている地域感情は「社会的責務からの逃避flight from social obligation」（Butler, 2002）によって特徴づけられるということであった。というのも、他の調査地域とは対照的に、ブリクストンの回答者は地域と関わりを持ちたくないという感情があることを明言していたためである。なお、そうした感情は、都市という場所を社会参加意識が希薄で社会的に隔絶された場所として考える伝統的な都市の捉え方と同調するものであった。一方、ブリクストンとは対照的に今日のペッカムでは地域との関わりを重視する感情が広がっており、社会的責務に対する高い意識も確認することができた。そしてそうした感情や意識を持つペッカムの中間階級は実際に地域との関わりを持ち始めており、それによって「地域主義の発達developing sense of localism」（Butler, 2002）も促進されているようであった。ペッカムにおけるこのような変化は、金融危機や公的セクターの削減の影響を大都市で暮らす中間階級が被った結果として考えられるのかもしれない。それは、より裕福な中間階級とペッカムの中間階級のあいだでは消費に関する習慣や趣向に違いがあり、ペッカムの中間階級はそうした習慣や趣向を改変することを間接的に強いられていたためであった。

ライ通というストリート、象徴的かつ物理的な中心地となっていたペッカムライ駅、こうした場所へ近接している近隣地域においては濃密な相互関係を見て取ることができた。そしてその事実は社会的・民族的な「他者」が容易には無視されないということを浮かび上がらせた。事実、ライ通やペッカムライ駅は近くにあるイーストダルウィッチと同様にペッカムの中間階級を主流の中間階級から分離させる存在として捉えられ、そうした「他なる場所」やペッカムで暮らす社会的・民族的な「他者」たちは場所に関する語りの中にも組み込まれ、既存の一般的な中間階級のイメージと対置された。

ここまで明らかにしてきた事実は中間階級と空間の関係性の理論化に様々な示唆を与えることになる。重要であるのは、ジェントリフィケーションに関する議論に取るに足りない何かを追加することではなく、中間階級が彼ら／彼女らの周囲にいる人々をどのように認識している

のかということを理解することである。エドワード・サイード（Edward Said）の言葉を借りると、アイデンティティの輪郭をかたちづくるのは「精神的な営為ではなく切迫した社会的過程」（1995: 332）である。その言葉通り、「他なる」人々や「他なる」場所への理解は空間的実践や空間的介入によって促されており、またそうした「他なる」人々や「他なる」場所が中間階級のアイデンティティに組み込まれる可能性があるということも明らかにすることができた。そして、ペッカムの事例から明らかとなったのは、「選択的帰属」が様々なフィールドを伴った数多あるハビトゥスのうちの１つに過ぎない、ということではなかった。つまり、「他なる場所」（本研究ではライ通）と中間階級が多い場所（本研究ではイーストダルウィッチ）という別々の場所で紡ぎ出された近隣地域に関する語りがあったわけであるが、「選択的帰属」というのはその両方を繋ぎ合わせる複雑なプロセスを内包しているということであった。そして本稿ではソーシャルテクトニクスが有効に活用できる比喩であるということを確認することができたが、一方で、ジェントリフィケーションの発生地域で見受けられる階級意識や人種的差異が如実に反映されている空間とアイデンティティの関係性についてはソーシャルテクトニクスでは完全に把握できていないということも確認することができた。そこで今後の研究としては細やかな差異や矛盾、そして日常的プロセスの説明に寄与すると考えられる近隣地域のダイナミクス（the dynamics of neighbourhood）の理論化が求められる。

原注

１）経済的支援に加えて本稿で活用したデータやそこから生まれた重要なアイデアに対するESRC、ANRの両研究チームの貢献について触れておく。特に恩義を感じているのは、主任調査員を務めたギャリー・ブリッジ（Gary Bridge）教授（ブリストル大学）とイギリス調査チームで共に調査を行ったミカエラ・ベンソン（Michaela Benson）博士（ゴールドスミス）である。1998年から2001年にかけてCities, Competitiveness, and Cohesion Programme（CCCP）が実施されたが、ESRC調査事業「中間階級とロンドンの未来」（L13025101）はそのCCCPの一部であり、先行的に予算配分を受けていた。本稿で使用したブリクストンのデータは、そのESRC調査事業を介して収集したものである。また本稿の筆者の１人であるティム・バトラーはギャリー・ロブソンの貢献にも言及しなければならない。というのも、ギャリー・ロブソンは上記の調査事業においてバトラーと協力関係にあった上に、「ソーシャルテクトニクス」という概念の創出に際してもバトラーと与したためである。

２）「ソーシャルミックス」という術語はある問題を抱えている。地域というものはそれぞれが有する歴史から何らかの影響を受けているのだが、そうした影響の上辺だけを拭い取って一括りにソーシャルミックスとして語られることがある。我われはジェントリフィケーションが発生し「社会的にミックスされた」地域となったブリクストンとペッカムを比較しているが、両地域が相互に関係しつつも別々の異なった歴史を有しているということを前提とした上で両地域を比較している。

３）「コミュニティの結束community cohesion」（Cantle, 2001）や「平行した生活parallel lives」（Phillips, 2005）に見られるコミュニティへの懸念に関する議論は、オールダム（Oldham）やバーンレイ（Burnley）、ブラッドフォード（Bradford）といった工場町で2001年に発生した暴動（この種の議論に関するより見識に富んだ意見としてはJones, 2014およびMcGhee, 2003を参照せよ）やロンドンでの爆破事件を受けて立ち現れてきたものであった。そしてこうした議論で示されてきた懸念は、労働者階級が多数派となっている地域のエスニシティ間でのセグリゲーションを対象とするものであった。しかしながら、イギリスのジェントリフィケーションとソーシャルミックスに関するアカデミックな議論は主として階級という用語をもってその枠づけが為されてきた。

4）ディベロッパーは事業計画の合意を取り付けるために地方自治体と交渉を行うのだが、その交渉の一環としてディベロッパーは、アフォーダブル住宅の供給、道路システムの拡張、他の施設（小学校等）の建設を介して地域のインフラストラクチャーの整備にいかに貢献するのかを表明する。そうした対応策の参照元となるのがSection 106協定である。
5）ロンドンでは民間賃貸住宅の増加が顕著であり、2001年と2011年の２つの調査のあいだにも民間賃貸住宅の割合は12%から21%にまで増加している（Office for National Statistics, 2013）。
6）我われは暴動より前にペッカムでインタビュー調査を実施していたが、その際経済不況に対して一定程度の不安があることを感じ取った。そしてそうした不安がペッカムにおいて否定的な影響として、とりわけ犯罪の増加というかたちで現れ出る可能性についても想定していた。その時感じ取った不安は他の研究対象地域よりもペッカムにおいてより大きかった。
7）ただし我われは、ペッカムでの中等学校教育に対する不安が将来的にブリクストンと同様のパターンをたどるということも１つの可能性として考えている。

訳注

1）原論文では「中間階級 middle-class」が具体的には定義されていないが、原論文の内容と原著者らの過去の研究論文をもとに原著者らによって研究対象とされている中間階級の属性を明示しておく。まず、ブリクストンとペッカムの両地域において共通しているのは、インタビュー調査の対象者の属性が20歳以上の主に白人の持家所有者であるということである。またButler and Robson（2003）においては６つの地域の中間階級、合計440人を対象とした調査結果がまとめられているが、ブリクストンがその６地域のうちの１つとして含められている。６地域440人のうちエスニシティに関する質問に回答したのは90%にあたる約400人で、そのうち97.5%が「White」であった。またその調査の全回答者の年間世帯収入は£10,000以下の層から£150,000以上の層までと幅広く、特定の世帯収入の層が特に多いということはなかった。一方、社会階層に関しては「Class１」から「Class ８」の８階層がある中で、ブリクストンの回答者71名のうち22.5%が「上級管理職・専門職層」、50.7%が「下級管理職・専門職層」と、全体の中で最もハイクラスな「管理職・専門職層」だけで73.2%に達していた（p.116）。よって、原論文（Jackson & Butler（2015））で検討対象とされているブリクストンの中間階級がButler and Robson（2003）での調査対象者と一致しているということを踏まえると、原論文中で言及されている「中間階級」とは、20歳以上の白人の持家所有者で、年間世帯収入は世帯によって異なるものの、社会階層は主として最もハイクラスな「管理職・専門職層」に分類される人々であると想定することができる。なお、原論文中でも指摘されているようにペッカムは本稿において新たに調査対象とされた地域であるため、Butler and Robson（2003）を含む過去の研究論文では対象とされていないが、原論文中において中間階級の属性に関して特段違いが言及されていない点からブリクストンとペッカムの中間階級の属性は近似しているものと想定することができる。
2）原論文中の「social tectonics」は「ソーシャルテクトニクス」とカタカナ表記にしている。その理由として重要な点は、この「social tectonics」という造語が地球科学分野で用いられる「plate tectonics」を発想の由来としているということである。このこと自体は原論文中で原著者らによって直接的に指摘されていることではないものの、「social tectonics」が比喩であるということについては繰り返し言及されており、また「plate tectonics」の「plate」（岩盤）を社会階層・エスニシティ・人種等が似通った「social group」（社会集団）に置き換えて状況の把握を行っているという趣旨の記述も確認することができる（原論文中p.2350およびp.2355）。そしてその発想の由来となっている「plate tectonics」という術語の訳語は、日本においては「プレートテクトニクス」というカタカナ表記で一般化している。そのため「プレートテクトニクス」を発想の由来とする「social tectonics」も「ソーシャルテクトニクス」とカタカナで表記することが望ましいと判断した。

参考文献

Atkinson R and Kintrea K (2000) Owner-occupation, social mix and neighbourhood impacts.Policy and Politics 28(1): 93–108.

Bacque M, Charmes E and Vermeersch S (2014) The middle class ‘at home among the poor’ - How social mix is lived in Parisian suburbs: Between local attachment and metropolitan politics. International Journal for Urban and Regional Research 38(4): 1211–1233.

Bacque ´ M, Bridge G, Butler T, et al. (in press) The Middle Classes and the City: A Study of Paris and London. Basingstoke: Palgrave.

Benson M and Jackson E (2013) Place-making and place maintenance: Practices of place and belonging among the middle classes. Sociology 47(4): 793–809.

Blokland T (2003) Urban Bonds. Cambridge: Polity.

Blokland T and Van Eijk G (2012) Mixture without mating; partial gentrification in the case of Rotterdam, the Netherlands. In: Bridge G, Butler T and Lees L (eds) Mixed Communities: Gentrification by Stealth? Bristol: Policy Press.

Butler T (2002) Thinking global but acting local: The middle classes in the city. Sociological Research Online 7 (3). Available at: http://www.socresonline.org.uk/7/3/butler.html.

Butler T and Hamnett C (2009) Walking backwards to the future – Waking up to class and gentrification in London. Urban Policy and Research 27(3): 217–229.

Butler T and Lees L (2006) Super-gentrification in Barnsbury, London: Globalisation and gentrifying elites at the neighbourhood level. Transactions of the Institute of British Geographers NS31: 467–487.

Butler T and Robson G (2001) Social capital, gentrification and neighbourhood change in London: A comparison of three South London neighbourhoods. Urban Studies 38(12): 2145–2162.

Butler T and Robson G (2003) London Calling: The Middle Classes and the Remaking of Inner London. Oxford: Berg.

Cantle T (2001) Community Cohesion: A Report of the Independent Review Team Chaired by Ted Cantle. London: Home Office.

Clark E (2005) The order and simplicity of gentrification – A political challenge. In: Atkinson R and Bridge G (eds) Gentrification in a Global Context: The New Urban Colonialism. London: Routledge, pp. 256–264.

Frankenburg R (1993) White Women, Race Matters: The Social Construction of Whiteness. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press.

Glass R (1964) London: Aspects of Change. Centre for Urban Studies, Report No. 3. London: MacGibbon & Kee.

Glucksberg L (2013) Wasting the inner-city: Waste, value and anthropology on the estates. PhD thesis, Goldsmiths.

Hackworth J (2002) Postrecession gentrification in New York City. Urban Affairs Review 37: 815–843.

Hall S (1997) Old and new identities, old and new ethnicities. In: King AD (ed.) Culture, Globalization and the World System. Minnesota, MN: University of Minnesota Press. Hall S (2012) Multilingual citizenship. Available at: http://www.discoversociety.org/multilingual-citizenship/ (accessed 7 November 2013).

Hamnett C (2009) The new Mikado? Tom Slater, gentrification and displacement. City 13(4): 476–482.

Hamnett C (2010) ‘I am critical. You are mainstream’: A response to Slater. City 14(1): 180–186.

Haworth C (2002) ‘So you're from Brixton?’: The struggle for recognition and esteem in a stigmatized community. Ethnicities 2: 237–260.

Hooks B (1992) Black Looks. Boston, MA: South End Press.

Jackson E and Benson M (2014) Not ‘deepest, darkest Peckham’ nor ‘run-of-the-mill’ East Dulwich: The middle classes and their others in an inner London neighbourhood. International Journal for Urban and Regional Research 38(4): 1195–1210.

Jones H (2014) ‘The best borough in the country for cohesion!’: Managing place and multiculture in local government. Ethnic and Racial Studies 37(4): 605–620.

Lawler S (2005) Disgusted subjects: The making of middle-class identities. The Sociological Review 3: 429–446.

Lees L, Slater T and Wyly E (2008) Gentrification. New York: Routledge.

Lefebvre H (1991) The Production of Space. Oxford: Basil Blackwell (trans. Donald Nicholson-Smith)(= 斎藤日出治訳『空間の生産』青木書店(2000)).

McGhee D (2003) Moving to 'our' common ground – A critical examination of community cohesion discourse in twenty-first century Britain. The Sociological Review 51(3): 376–404.

May J (1996) Globalization and the politics of place: Place and identity in an inner London neighbourhood. Transactions of the Institute of British Geogrpahers 21(1): 194–215.

Office of National Statistics (2013) A century of home ownership in England and Wales. Available at: http://www.ons.gov.uk/ons/rel/census/2011-census-analysis/a-century-of-home-ownership-and-renting-in-england-and-wales/shortstory-on-housing.html (accessed 15 December 2013).

Paton K (2010) Making working-class neighbourhoods posh? Exploring the effects of statesponsored gentrification. In: Taylor Y (ed.) Classed Intersections Spaces Selves and Knowledges. Surrey: Ashgate.

Phillips T (2005) After 7/7 Sleepwalking to Segregation. Speech to the Manchester Council for Community Relations. Manchester: Commission for Racial Equality.

Rex J and Moore R (1967) Race Community and Conflict A Study of Sparkbrook. Oxford: Oxford/IRR.

Said E (1995) Orientalism. London: Penguin.

Savage M, Bagnall G and Longhurst B (2005) Globalization and Belonging. London: SAGE.

Scarman G (1982) The Brixton Disorders 10–12 April 1981. Harmondsworth: Penguin.

Skeggs B (2004) Class, Self, Culture. London and New York: Routledge.

Slater T (2006) The eviction of critical perspectives from gentrification research. International Journal of Urban and Regional Research 30(4): 737–757.

Slater T (2009) Missing Marcuse: On gentrification and displacement. City 13(2): 292–311.

Slater T (2010) On gentrification, still missing Marcuse: Hamnett's foggy analysis in London town. City 14(1–2): 170–179.

Talbot D (2007) Race, Culture and Exclusion in the Making of the Night-Time Economy. Aldershot: Ashgate.

Warde A (1991) Gentrification as consumption issues of class and gender. Environment and Planning D Society and Space 6: 75–95.

Watt P (2009) Living in an oasis: Middle-class disaffiliation and selective belonging in an English suburb. Environment and Planning A 41: 2874–2892.

【謝辞】

原論文の翻訳に際してJSPS特別研究員奨励費（課題番号：18J23295）の一部を利用した。

Revisiting ‘social tectonics’ : The middle classes and social mix in gentrifying neighbourhoods

Emma Jackson and Tim Butler
Translated by MATSUO Takuma

In this paper, the authors examine two neighbourhoods, Brixton and Peckham, located in South London. Brixton and Peckham are both symbolic neighbourhoods in terms of ethnically and socially mixed situation, and also are known as gentrifying neighbourhoods. Referring to accounts of white middle classes respondents who live in each neighbourhoods, the authors focus on some questions comparing Brixton and Peckham; how white middle-class people consider ‘other people’ or ‘other place’ , how their understanding about that is related to their sense of values and attitudes, and how these are reflected on special environment s . As a result, the authors concluded that the presence of social and ethnical ‘others’ are centered to the formulation of middle-classes’ identity. And, it is concluded that in Brixton we can examine ‘social tectonic’ situation, on the other hand, in Peckham, middle-classes’ understandings and attitudes toward ‘others’ can change as time passes.